月刊FALCOM MAGAZINE
Vol.155



シャロンが晴着姿を披露！
『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

英雄伝説 零の軌跡
四つの運命

お姉ちゃん海賊のお宝チェック！
も～っと集まれ！ ファルコム学園

『軌跡』シリーズ最新作が発表！
ゼムリア大陸での物語が激変する!?

# 『英雄伝説 界の軌跡 Farewell, O Zemuria』



FALCOM MAGAZINE

# CONTENTS

軌跡シリーズ20周年記念タイトル

# 英雄伝説 界の軌跡 -Farewell, O Zemuria-

## 2024年発売決定！





INTRODUCTION

「120X 年、全てが終わる」
ゼムリア大陸の終焉を予言した
導力革命の父、C・エプスタイン——



その“Xデイ”が差し迫るなか、
崑崙の地に築かれた巨大基地から
一基の導力ロケットが打ち上げられようとしていた。



「人は大気圏外へと辿り着けるのか？」
「大陸の果てには何が在るのか？」
「人類は“世界”の真実を識ることができるのか？」

有史以来の大事業を見届けようと全世界が注目する中、
技術的特異点（シンギュラリティ）とも言うべきオレド自治州のとある場所には
《裏解決屋（スプリガン）》の青年をはじめ
各地からの勢力が集結しようとしていた——。





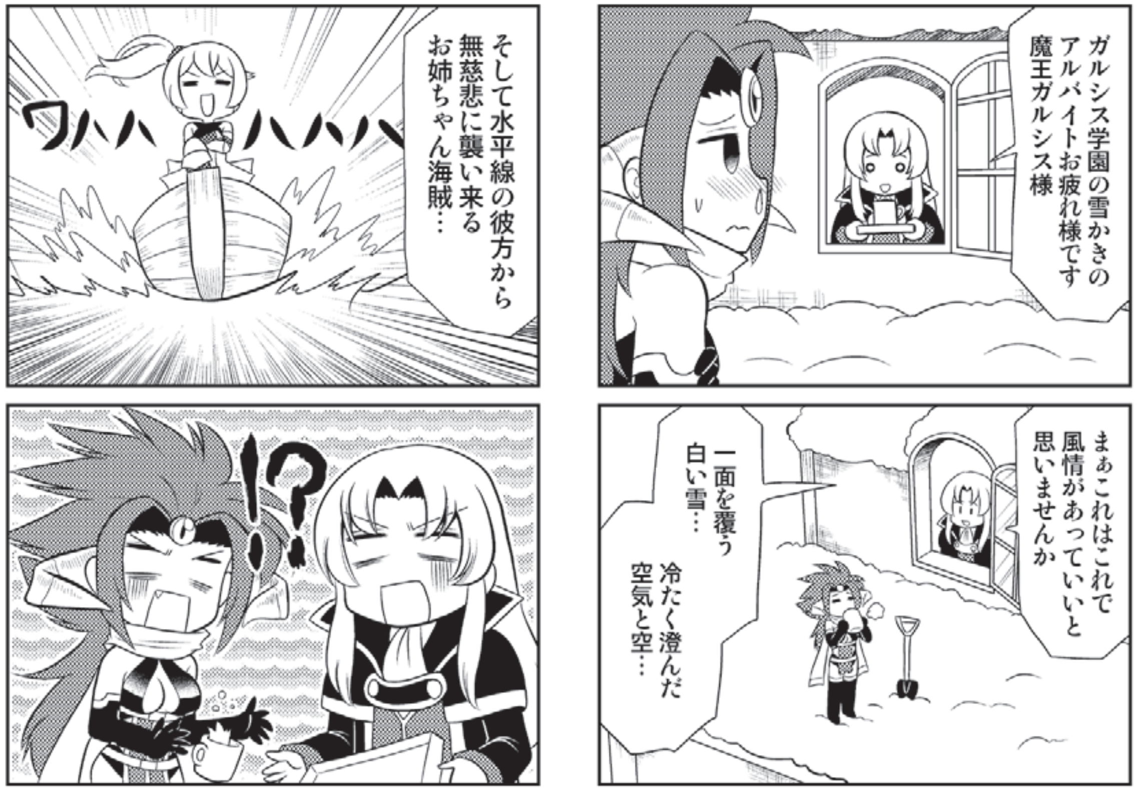
果たして、
遥かなる天を目指す一筋の軌跡はゼムリアの未来となるのだろうか……
それとも——

シリーズ第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』（2004年）から20年。その節目を迎える2024年に発売される『軌跡』シリーズ最新作のタイトルが『英雄伝説 界の軌跡 -Farewell, O Zemuria-』となることが判明した！ ゼムリア大陸を舞台とした同シリーズだが、タイトルの『界』、さらに副題に『Farewell, O Zemuria』と、世界全体に激変が訪れそうな気配を感じさせる壮大な名称となっている。タイトルの発表とあわせ、開発画面のスクリーンショットが６点到着。気になるタイトルロゴやイメージビジュアルなどは続報を待て！

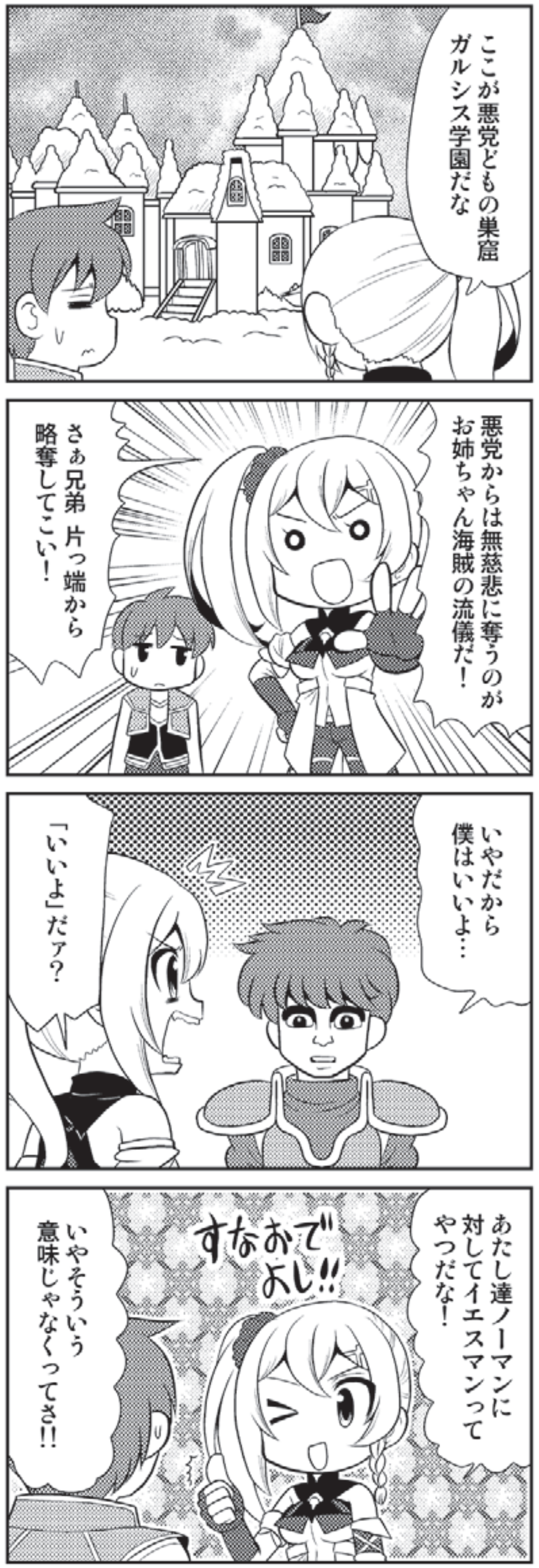
**タイトル**：英雄伝説 界の軌跡 -Farewell, O Zemuria-　**発売日**：2024年予定
**ジャンル**：ストーリーRPG　**対応機種**：未定　**価格**：未定

★お姉ちゃん海賊、またまた登場!!★

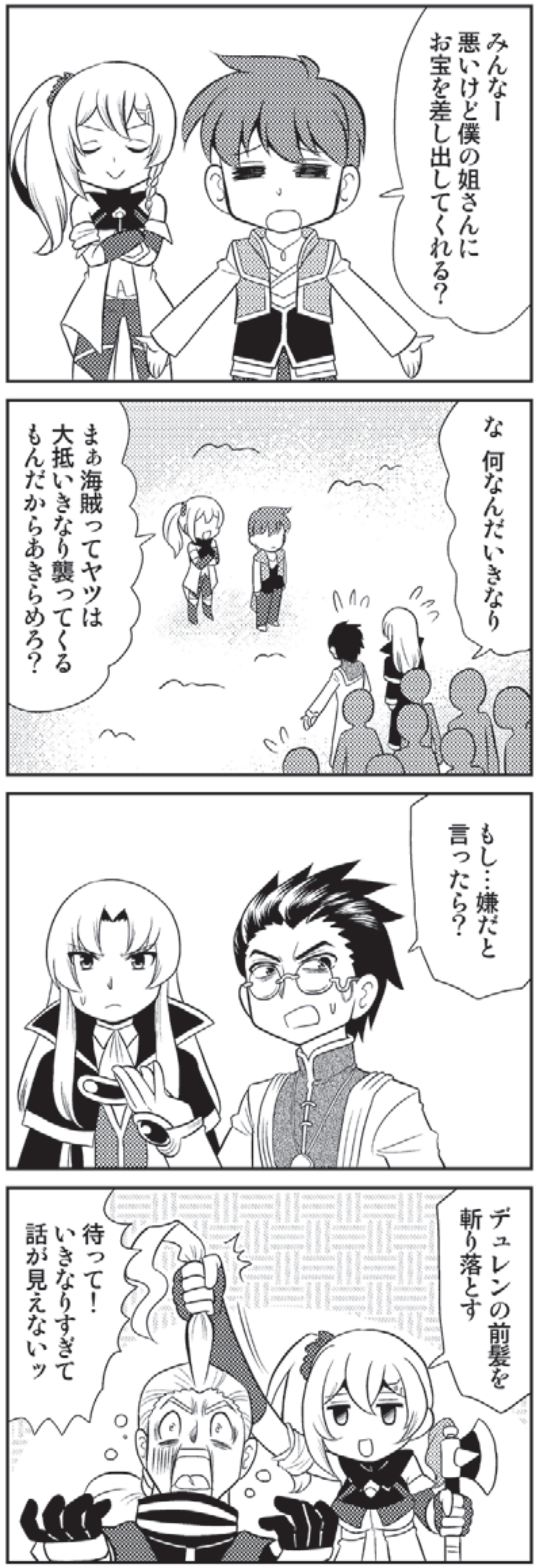


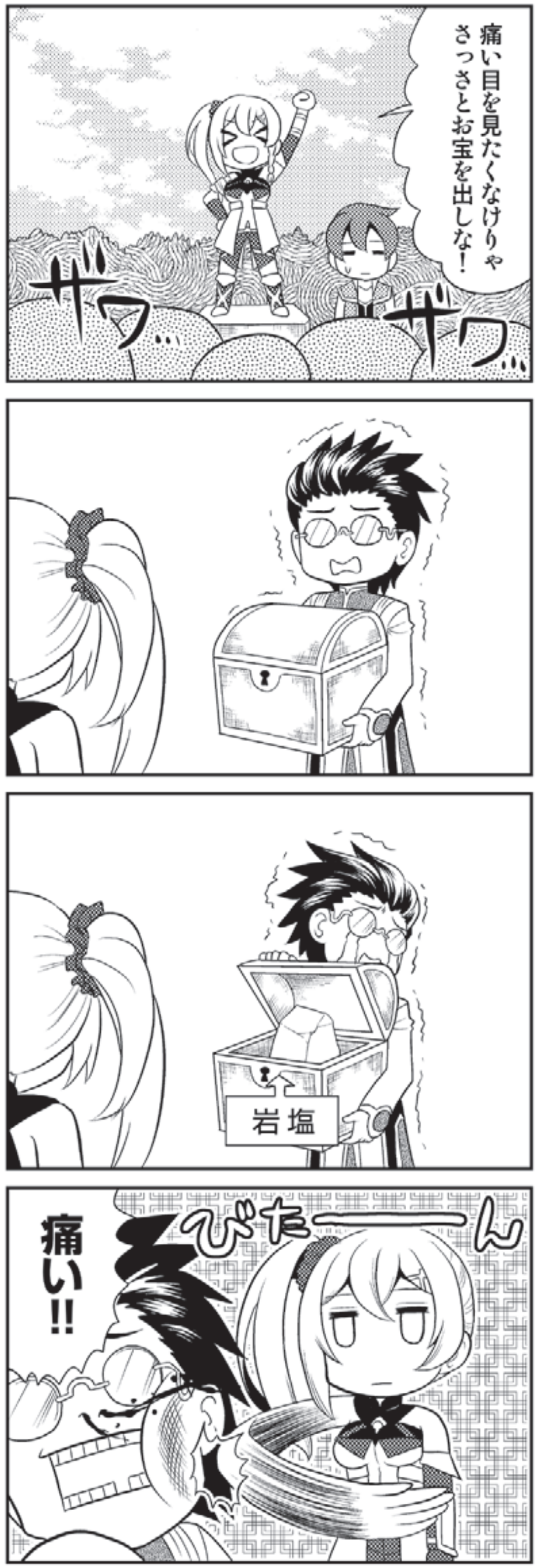

## 素直な弟分




## いきなりの襲撃



## ワイスマンのお宝



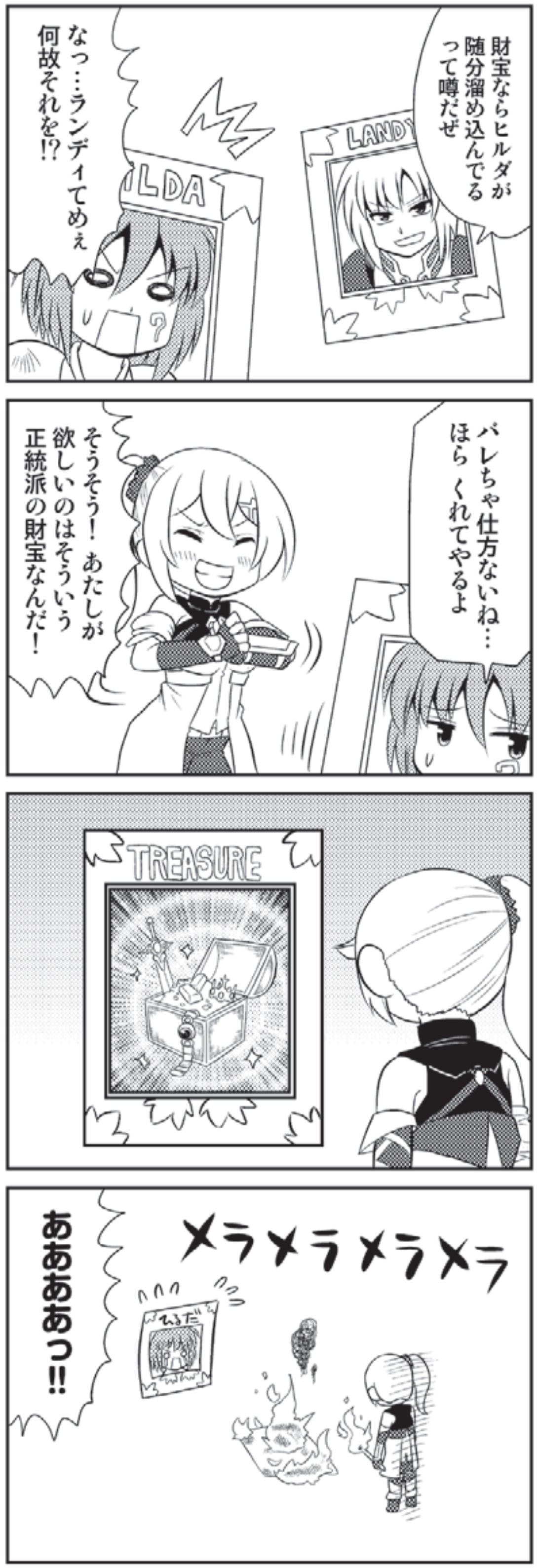

## 御厨のお宝




## シークレットなお宝




## 正統派なお宝



## イキリ兄弟



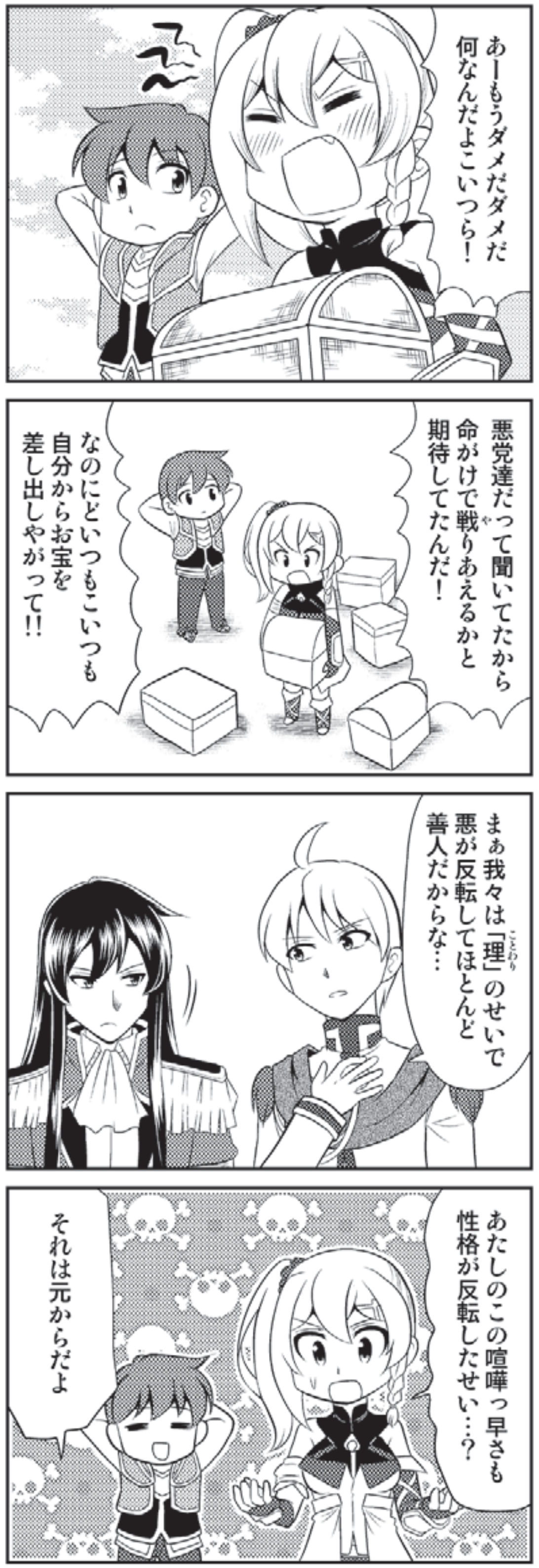

## 驚きの肖像画




## ひとつなぎの財宝



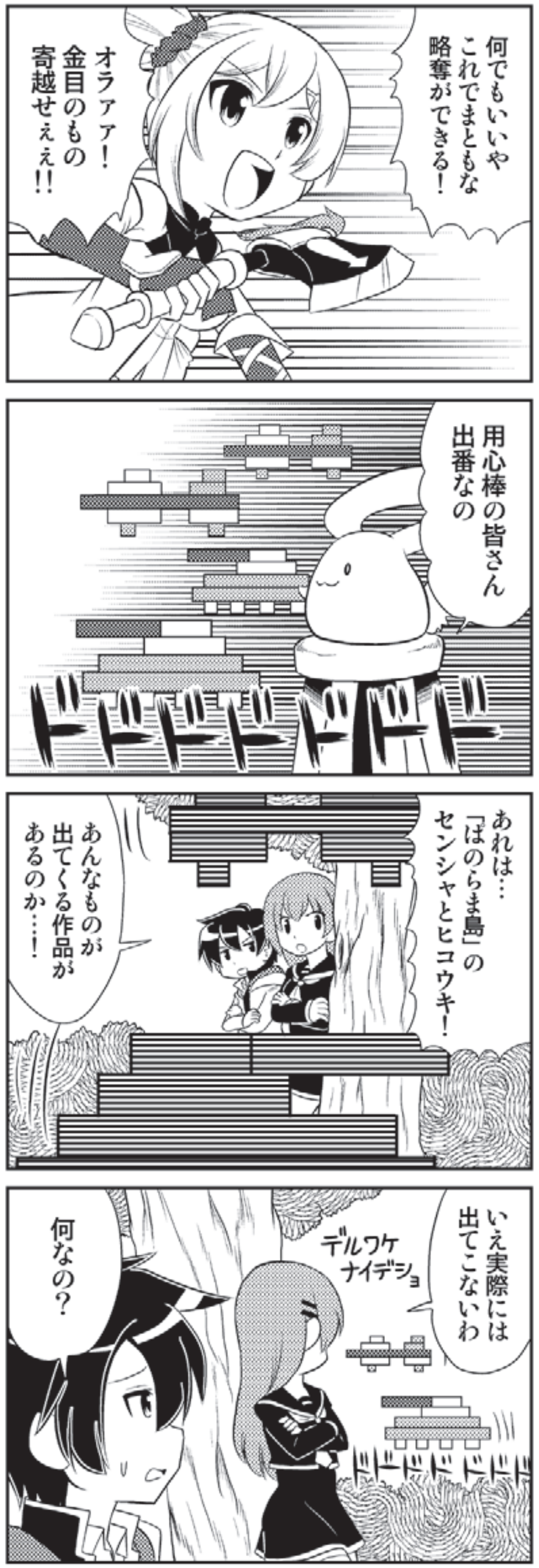

## ワガママな姉



## ザナドゥの頂点




## モナくんの用心棒




## 理解ありすぎる姉




## 生き残った毒





英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価:1000円(本体909円+税)
ISBN978-4-8021-3309-8
発行:フィールドワイ 発売:メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU ©Field-Y






穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！
待望の第2巻だよ！
も〜っと集まれ!
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円+税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y

# ▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

## 【全国3か所】Falcom jdk BAND LIVE 2024開催！特典トート付きチケット発売中！




4年振りとなる日本公演東名阪ツアー《Falcom jdk BAND LIVE 2024》の開催が決定。1月13日の東京公演を皮切りに、大阪・名古屋の計3か所で開催いたします。会場ではイースXサントラをはじめ、ライブTシャツ（全3色）、タオル、ステッカーセットなどのグッズを販売予定。

**【1】東京公演**
日時：2024年1月13日（土）開場18:00開演19:00
会場：吉祥寺CLUB SEATA

**【2】大阪公演**
日時：2024年1月26日（金）開場18:00開演19:00
会場：246ライブハウスGABU

**【3】名古屋公演**
日時：2024年1月27日（土）開場18:00開演19:00
会場：ell.FITS ALL



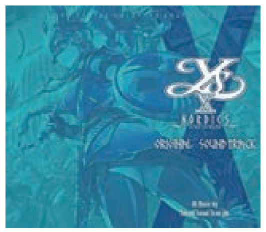
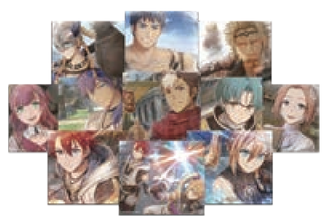

■**出演者**：《Falcom jdk BAND》
佐坂めぐみ（ボーカル）／よしだ さくら（ギター）／関口功二（ギター）／ADD（サックス）／谷崎航大（ヴァイオリン）／gakia2（キーボード）／NAOKIX（ベース）／山崎善紀（ドラム）
■**座席**：スタンディング
■**料金**：¥6,000（税込）※特典「トートバッグ」付き

**特設サイト**
https://www.falcom.co.jp/jdk/2024/

**チケット購入ページ(イープラス)**
https://eplus.jp/sf/word/0000051908

## 『イースX -NORDICS- オリジナルサントラ』発売！

『イースX-NORDICS-』より劇中使用曲を完全収録したCD3枚組音楽アルバムが2024年1月18日に発売。CD盤は初回生産分のみ、イラストカード11枚セットを封入した特製スリーブ仕様。さらに、ファルコムショップでお買い上げの方には、「たつぐるみアドル&たつぐるみカージャ」のアクリルフィギュアスタンドが同封されます。




■**発売日**：2024年1月18日（木）
■**価格**：CD盤 3,400円（税抜）／DL版 2,917円（税抜）／単曲 139円（税抜）／ハイレゾ版 3,148円（税抜）／単曲 231円（税抜）
※発売日より、定額音楽配信サービスでの楽曲提供も開始

**商品ページ**
https://falcom.shop/products/detail/597



## 「アリサ・ラインフォルト」1/7スケールフィギュア予約開始！

『英雄伝説 閃の軌跡II』の「アリサ・ラインフォルト」1/7スケールフィギュアが2024年12月に発売が決定しました。ノースリーブ、ミニスカートの特徴的な旅装を着こなす、抜群のプロポーションを完全再現。手にした「導力弓」は、その形状から装飾のカービングに至るまで美しくシャープな仕上がりに！
全国のホビーショップ、ECサイトで予約受付中です。




■**発売日**：2024年12月予定　■**価格**：27,280円(税込)

**製品情報（キューズQ）**
https://www.quesq.net/products/legend_of_heroes_sen_no_kiseki_2_alisa_reinford/index.html

## 「《銀の騎神》アルグレオン」「《鋼の聖女》アリアンロード」立体化決定！

グッドスマイルカンパニーより、七体の騎神の一角「《銀の騎神》アルグレオン」がMODEROIDシリーズでプラキット化。そして、起動者の「《鋼の聖女》アリアンロード」もPLAMATEAシリーズよりプラキット化が決定しました。続報をお楽しみに！




**詳細→《メカスマインパクト2024WINTER》**
https://www.mechasmile.com/msi_2024w/

## 『軌跡シリーズ』フィギュア化企画第9弾「エステル・ブライト」1/8スケールフィギュア予約受付中！

エステルの前から姿を消したヨシュアを探しながら、《身喰らう蛇》との闘いを描いたシリーズ第二作「空の軌跡SC」の衣装を再現。
往年のファンには馴染み深い、「空の軌跡SC」のキービジュアルを彷彿とさせるポージングで立体化！
また、フィギュア化計画10弾が決定！『英雄伝説 空の軌跡SC』より、エステルに続いて「ヨシュア・ブライト」がフィギュア化です。続報をお楽しみに！




■**メーカー受注締切**：2024年1月30日(火) ※以降は上限に達し次第受付終了
■**発売日**：2024年6月予定　■**価格**：20,900円(税込)

**コトブキヤオンラインショップ**
https://shop.kotobukiya.co.jp/shop/g/g4934054056125/?utm_source=kotobukiya.co.jp&utm_medium=referral&utm_campaign=product

12月の 新／衣装替えキャラクターをチェック！



## 晴着・シャロン

「花」や「蝶」をイメージさせる意匠が各所に凝らされた艶やかな晴着姿を披露したシャロン。和のテイストを身に纏いながらも靴はピンヒールと、そのギャップもまた蠱惑的だ。

# THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
12 月はクリスマスを前にティオがみっしぃのために奔走する期間限定イベントシナリオが開催。
そして、シャロンがなんとも艶やかな晴着姿を披露！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式 X
https://twitter.com/akatsuki_ujj

## 期間限定イベント「Bye Bye Missing」が実装！

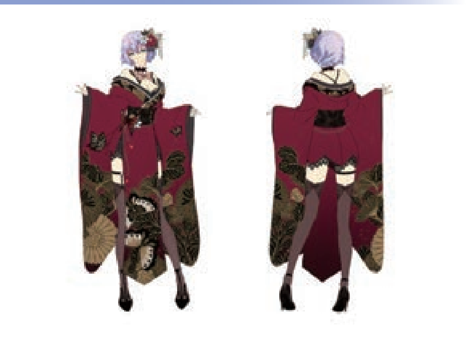
クリスマスの前夜。特務支援課ビルには仕事に追われているロイドたちの姿があった。
淡々と資料を作るティオは内心、明日の予定のことでソワソワしている。
みっしぃたちの夢の国「ミシュラムワンダーランド」行きのチケットを傍らに置いて……



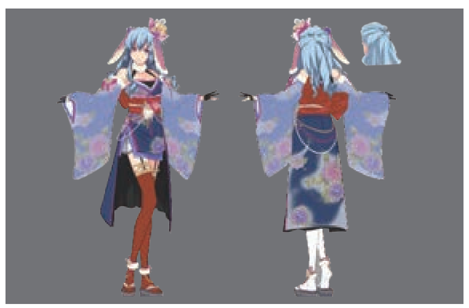
※このイベントは終了しています。

## 『暁の軌跡』極秘資料館

「晴着・シャロン」衣装デザインラフ
（2023 年 12 月実装）



「晴着・クレア」衣装デザインラフ
（2022 年 12 月実装）



※画像は開発中のものです。※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。


英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks


リベール王国次期女王たるわたくしの名に賭けて！
リベール王国に姿を現した、
結社《身喰らう蛇》の牙・執行者たち。
その動きと示し合わせたかのような
エレボニア帝国の不穏な行動に王国は揺れる。
そして物語は、古代ゼムリア文明の精華・
リベル＝アークへと飛翔する！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑥
啄木鳥しんき
定価：1000円（本体909円+税）　ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ　発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
◉フィールドワイ公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp
◉ファルコムブックス公式HPはこちら➡ www.field-y.co.jp/falcombooks

クロスベル警察特務支援課の
ルーツを今振り返る！

# 英雄伝説 零の軌跡 ～四つの運命～






クロスベル自治州という、エレボニア帝国＆カルバード共和国の二大国に囲まれた地を舞台とした『英雄伝説 零／碧の軌跡』。主人公のロイド・バニングスをはじめとするクロスベル警察特務支援課のメンバーは、様々な【壁】を乗り越えるため、州内はもちろんのこと、各国で活躍を続けてきた。帝国、共和国の共同委託統治下から独立、帝国領下、再独立と、数年で激動の時を迎えたクロスベルを支えたロイドたちの原点を、今再び振り返ってみよう。



# 第一章　不良グループの抗争

この世界では、空の女神（エイドス）が、はるか天空から人々を見守っているという。
その神の世界から下界を見下ろせば、大地は緑深く、海は碧い。唯々、美しい世界が広がっているように見える。
だが、実際は違う。
多くの人がその大地に生まれ、暮らし、笑い、泣き、憎しみ、争い、奪い、奪われ、繁栄し、滅びていく。
人々は大地の上に国境線を引き、見えもしないその線をめぐって、駆け引きをし、多くの金と時間と命を浪費していた。

クロスベル自治州。ゼムリア大陸西部に位置し、エレボニア帝国とカルバード共和国というふたつの大きな国家に挟まれた地にあるこの自治州は、国境線の狭間で踊るダンサーのようなものである。
元々大陸有数の貿易都市のひとつだったが、エレボニア帝国とカルバード共和国、そして、小国ながら巧みな外交で両国と拮抗する隣国リベール王国の三カ国間で結ばれた《不戦条約》以降、投資対象として諸外国の資本の流入が加速した。
自治州の中心となるクロスベル市街では、次々とデパートやオフィスビルが建てられ、それ



に呼応するように人と物と金が集まっている。
建物は、活況を見せつけるかのようにそびえ立ち、店には美しいドレスや宝石、さらには遠い異国の珍しい品々までが並ぶ。そして、それらの繁栄を享受しようと、多くの人々が行き交う。
しかしこの華やかな街の裏には、多くの影が潜み、うごめいていた。
クロスベルというダンサーは、一心不乱に踊り続ける。無事踊りきり、喝采を浴びるのか。それとも踊りの途中で力尽き倒れ、大国に食い散らかされるのか、あるいは足を踏み外し、奈落の底へ落ちるのか——その行く末は、今は誰も知らない。

クロスベル自治州の中心地、行政と商業の要となっているクロスベル市街は、さまざまな色を持った街がモザイクのように集まっている。
多くの人々が行き交い賑わう中央通り。カジノや高級ホテルが立ち並び、不夜城の様相を呈している歓楽街。警察や図書館、美しい芝生の広場がある整然とした印象の行政区。雑然とした中にも生活感と活気を感じられる住宅街。
そして、どこか薄暗く、退廃的な空気を漂わせる旧市街（ダウンタウン）。市街の住人も、用がない限りは近寄らない、むしろ用があっても近寄りたくないと考える場所である。
力をもてあました若者たちがケンカを繰り広げ、街のあちこちにその傷跡が残るダウンタウ

ン。その傷跡がもっとも顕著な広場に、いま三組の集団が対峙していた。
ひとつは、揃って赤色のジャージを羽織っている若者が四人。ジャージの背中には、毒蛇が剣に巻きついている紋章が描かれている。その凶暴な顔つきから、すぐにダウンタウンに巣くう者たちだと分かる。
もうひとつは、同じく揃いの青色の服を着ている若者の集団。こちらも数は四人。彼らの着ている服は、幾何学模様のデザインが施され、一種宗教的とも言える雰囲気を醸し出している。彼らもまた、ダウンタウンに巣くう者たちだ。
赤と青、ふたつの不良グループたちの抗争なら、ここダウンタウンでは日常茶飯事である。現に彼らは身体のあちこちに傷を作り、肩で息をしていた。戦いがあった証拠である。
しかし、今日はもうひとつ、不可思議な集団がいた。どう見てもダウンタウンの住人ではない青年に、年端のいかぬ少女まで混じっている。
しかも彼らは武器を構え、その不良グループたちを威圧していた。この第三の集団が、赤と青の青年たちを叩き伏せたのだ。
「もうやめるんだ！」
と、第三の集団のひとり、先頭に立っていた青年が、声を張りあげた。
凛としたその声は本人の中に眠る意志の強さを垣間見せる。





しかし、その場に、耳を傾けようとする者はいなかった。
「こ、こいつら、ただの素人じゃない……!?」
不良グループたちは、当然ながら腕に覚えのある者たちの集まりである。その自分たちが、体格的には圧倒的に劣る者たちになすすべもなくやられた。そのことが信じられないのだ。
特に、第三の集団の中で、もっとも幼い少女が持つ力に驚愕していた。
「あ、あの杖はなんだ？　ビリビリきたぞ……」
「魔導杖の威力、分かっていただけましたか……？」
少女は、青装束の青年たちをけん制するように杖を突き出す。
彼女の服装は独特で、もっとも目立つのが胸部にある、逆三角形状の装甲である。胸部の装甲は肩当てと繋がっており、肩当てからは短いマントが延びていて、特徴的なシルエットを形作っている。
足元は、丈の短めなプリーツスカートに、腿のあたりまで覆うサイハイソックスを履いている。そのすべてが、ダークブルーを基調にし、オレンジと白のラインで縁取りをしたデザインでまとめられている。サイハイソックスとプリーツスカートのあいだ、チラリと見える素足は白く美しい。
手に持つ杖は、先端に特殊な意匠が施されている。魔導杖（オーバルスタッフ）と呼ばれるこの杖は、詠唱なしで



魔法（アーツ）と呼ばれる特殊な力を喚起することができる、最先端技術の固まりだ。
顔立ちはまだ幼さを残している。ライトブルーの髪の毛を、頭の上でふたつに束ねた髪型がその印象を強くしている。さらに頭部には、カチューシャのような頭部装着型感知装置（ヘッドギアセンサー）がつけられており、そのセンサー部分が、まるで猫の耳のような形状をしている。そのせいで、よりかわいらしい雰囲気がある。
しかし、相手を見据える瞳には、不思議と大人びた印象が漂っていた。
第三の集団のひとり、大柄な男が、茶化すように少女に声をかける。
「おー、ティオすけは怖いねぇ」
「私の名前はティオです、すけは余計です、ランディさん」
そう言って、相手をジト目で見る少女の名はティオ・プラトーという。
ランディと呼ばれた相手は、おー怖い怖い、と再び茶化した。
ランディ・オルランド。年は二〇歳前後といったところだろうか。赤茶色の髪に、長身のせいでスマートに見えるものの、よく見るとかなりがっちりとした体躯。顔立ちから優男という印象を受けるが、彼が軽々と持っている戦斧は、導力を衝撃力に変えるユニットが取りつけられており、その重さは並の男では持ち上げるのにもひと苦労するほどである。
黒のパンツに、グレーのタートルネック、その上に着ているのは、衝撃吸収のためのベスト。

その上からオレンジ色のミリタリーコートを着込み、手首を穴あきグローブで保護している。見た目よりも機能性を重視した格好だ。

「クソが……！　やっぱ遊撃士じゃねえか！」

赤ジャージの若者のひとりが、罵声を浴びせかける。

「だから、俺たちは遊撃士じゃねーって。まぁ、やってることは人捜しに、おつかいに、たまに魔物退治だけどな」

「くっ……ふざけたことを。やはり遊撃士ではないか！」

今度は青装束の若者のひとりが怒鳴る。

と、その怒鳴り声をさらりと受け流すかのような、美しい声が響いた。

「まあ、そう思われても仕方ないわよね。やっていることは、あまり変わらないもの」

そう言ったのは、第三の集団のひとり、ティオよりも幾分か年上に見える少女だった。

エリィ・マクダエル。腰まで伸びるパールグレーの髪が印象的である。その表情や物腰から、良家のお嬢様を連想させる。しかし、本来ならば日傘でも持ちそうなその手には、旧式の導力銃が握られていた。

健康的な身体を包むのは、白のタイトワンピース。ワインレッド色の長袖のボレロとのツートンカラーになっている。すらりと伸びた脚は、黒いタイツで覆われていて、足元はワンピー



スと同じ白色のブーツ。腰元に太めのベルトを巻いていて、身体の両側に、ワインレッド色をした大きな『たれ』のようなものを下げている。これは飾りではなく、内側に導力銃をしまうためのホルスターである。

「ふざけたことを……なめんじゃねぇぞ、このアマ！」

もうひとりの赤いジャージを着た男が、かみつかんばかりの勢いでエリィに怒鳴る。エリィが反射的に身を引いたところに、割って入るようにひとりの青年が立つ。先ほど声を上げて、彼らの動きを制止しようとした青年だった。

名をロイド・バニングスという。ラフに切りそろえられた茶髪に、まだ少年の面影を残す顔つき。だが、その瞳には、強い意志が宿っている。

そしてその手には、トンファーが握られていた。東方由来の、防御力と制圧力に優れた武器である。

ところどころ補強を施したアーミーパンツに、丈夫なブーツ。タートルネックのシャツを中に着込み、その上から、白地に袖の部分が青色のジャケットを羽織っている。ジャケットの左肩と背中には、クロスベル警察の所属を表す紋章が入っている。

ここまで分かりやすく警察の格好をしているのに、遊撃士に間違われるとは……と、ロイドは内心でため息をついた。

「さっきも言ったけど、俺たちはクロスベル警察・特務支援課だ。市民の通報で、ここで不良グループのケンカが始まろうとしているという情報を得て……」

「不良グループじゃねえよ！」

「まったくだ。我らは誇り高き集団。そこの下衆な者たちと一緒にしてもらっては困る」

「ンだとおらァ！」

赤ジャージと青装束が勝手にケンカを始めようとしたので、ロイドはあわてて間に入る。

「だから！　そういう風にケンカにならないよう、俺たちがやってきて……」

話し合いで解決しようとしたが、問答無用で襲いかかられたので、実力で退けたところである。

しかし、その程度でめげるなら、市民もわざわざ通報したりはしない。彼らは、このダウンタウンでももてあますほどの『ワル』なのだ。

彼らの怒りの矛先は、仲裁に入ろうとしたロイドへと再び向けられた。

「上等だテメェ！　今度こそボコってやるから覚悟しろ！」

「ダウンタウンにはダウンタウンのルールがある。警察ごときに邪魔をされるいわれはない」

痛めつけられてもなお、彼らはやる気である。

ロイドは頭の中で、次の一手を考えていた。

さっきは手加減したが、今度は本気でやるしかないか……？　だが、あまり無駄な血は流したくない。一体どうする？

考えあぐねていたその時、

「——その辺にしときなよ」

あたりに、涼やかな声が響いた。

すると、それまでいきり立っていた赤ジャージと青装束全員が、途端に息を呑んだ。

ロイドが声のした方を見ると、そこには美しい女性の姿があった。しかし、その身のこなしを見て、女性と思われたその人物が、どうやら男性らしいとロイドは気づく。つい見間違えてしまうほど、その人物の顔立ちは整っていた。

彼の服装は特徴的で、上半身こそ青装束の男たちが着ているものと似ているが、胸の下ですっぱりと切れていて、腹部がまる見えである。しかし、そこに見える腹筋は見るからに鍛えられており、彼がただの優男でないことをうかがわせる。

脚は黒のパンツの上に白いブーツを履いており、右足のブーツには青色のアクセントラインで十字が引かれている。

「ワジ……来てたのか」

青装束の青年のひとりが、ぽつりとつぶやく。

ワジと呼ばれた人物は、ただ微笑みを返した。

しかし、その微笑みは美しさもあいまって、青装束の集団を黙らせるだけの凄味があった。
彼の後ろには、やはり同じく青装束を着た、たくましい体躯のスキンヘッドの男が無言で控えている。
何も言葉を発しないが、そのたたずまいを見てランディはすぐに、
――タダ者じゃないな、アレは。
と気づいた。
その時、肉食獣を思わせる、どう猛そうな声が、ワジがやってきた方向とは反対から響いた。
「おいおい……揃いもそろって何やってやがる」
今度は赤ジャージの男たちが色めきだつ番だった。
「ヴァ、ヴァルドさん……!」
ヴァルドと呼ばれた男は、大股でのっしのっしと歩いてくる。その体つきも、声と同じ肉食獣を連想させる、大柄で筋肉質なものだった。
ゆったりとした赤のパンツ。太いベルトには、チェーンがぶら下げられている。上半身は、その強靭な肉体を見せつけるかのように、ところどころに鋲が打たれた赤いベストを羽織っているだけだった。
「どうやら、両方のチームの頭（ヘッド）のお出ましらしいな」



ランディが、ロイドにだけ聞こえるように耳打ちをした。
ヴァルドは、赤ジャージの集団の前に立った。
「人が昼寝をしてる間に、楽しそうな事をしてるじゃねぇか。なあ、お前ら……こいつは一体どういうつもりだ？」
全員をギロリとにらみまわす。にらまれた方は、さながらヘビと対峙しているカエルのように、脂汗をかいている。
赤ジャージを着た男のひとりが、なんとかこの場をごまかせないかと口を開いた。
「へへ、なんと言いますか。青坊主どもにお仕置きをしようとしたら、この変な連中がですね……」
ヴァルドは、なおも口を開こうとする男の胸ぐらをつかみ、苦もなく持ち上げた。
「ひいっ……！」
身体が浮いてしまい、足をジタバタさせ、おびえる男。ヴァルドは、相手の顔に自分の顔を思いっきり近づけ、地獄の底から聞こえるような低い声ですごむ。
「このタコが……先走るなって言ったろうが、あァ!?
てめえら前座がしゃしゃり出て、俺様の顔を潰すつもりかよ……？」
持ち上げられた男は、必死に首を振って否定した。

「め、め、滅相もない！　ヴァルドさんの顔を潰すなんて、これっぽっちも……！」
フン、とつまらなさそうに言い、ヴァルドは男を放りなげた。
ぎゃっ！　と声がして、男が尻もちをつく。
その様子をつまらなそうに見ていたワジだったが、青装束の集団に向けて口を開いた。
「君たちも、一体どういうつもりかな？　僕の言ったことが聞けないっていうわけ？」
ワジにジロリ、と見つめられ、青装束の男たちはあわててかぶりを振る。
「だが、ワジ……」
「こ、こいつらが絡んでくるから、つい……」
必死に言い訳をしようとする男たちを冷ややかに見つめるワジ。見かねたように、後ろに立つ大男が言った。
「――言い訳はいい。俺たちはワジの手足。余計な気を回す必要はない」
そのひと言で、青装束の男たちはしゅん、としてしまった。
「分かった……」
「も、猛省する……」
そんなふたりを見て、判ってくればいいよ、とワジは興味なさそうにつぶやいた。

ワジと青装束たちのやりとりを見て、ヴァルドがニタリと笑う。
「相変わらず気色の悪い連中だぜ。舎弟にそんな格好をさせて、どこぞの宗教家気取りかよ？」
「別に僕がその格好を強制してるわけじゃないけどね」
今度はワジがニヤリと笑った。
「そっちの方こそ、手下に当り散らしてばかりだと、お里が知れるってもんだよ？　お山の大将さん」
完全な挑発行為である。だが、ヴァルドは怒ることなく、ニタリと笑った口の端をさらに上げ、ただ笑っていた。
「ククク……」
そんなヴァルドの様子がおかしいのか、ワジもつられて笑う。
「フフフ……」
ふたりのやりとりを見ていたロイドは、心の中でつぶやいた。
――一体どういうことだ？　ふたりは明らかに敵対してる不良グループのリーダーだ。それなのに、この関係は……。
ロイドがいぶかしんでいると、ワジが話しかけてきた。
「君たち、警察の人って本当？　とてもそうは見えないけど」

続けて、ヴァルドがランディを獲物を狙う目でにらみつけながら言う。
「特にそこの赤毛……いいガタイしてんじゃねぇか」
「そりゃどうも……アンタほどじゃないけどな」
ヴァルドに褒められ、ランディは肩をすくめた。この場合褒められるのは『ガチンコで勝負したい』という意思表示だと知っているからだ。
ヴァルドの獲物を狙う視線は、エリィとティオに向かった。
「まあ、そっちの姉ちゃんたちは、とても警察には見えねぇけどなァ。なかなかの上玉じゃねえか？」
舌なめずりでもしそうな表情で見つめられ、エリィは背筋にぞわり、といやな感覚が走る。ティオに至っては、魔導杖を握りしめ、今にも振りかぶりそうな勢いだ。その空気を察したロイドが、話を変える。
「新人だが、全員警察の人間だ。『特務支援課』という新部署に所属している」
ワジの目が、軽く見開かれる。
「《クロスベルタイムズ》に載っていたアレか。へぇ、君たちが」
「なんだァ？　コイツら何かやらかしたのかよ？」
ヴァルドの疑問に、ワジが答える。
「ああ、ジオフロントでは大活躍だったみたいだよ」
そこまで言ってワジは、クスリと笑った。
「ギルドの噛ませ犬としてね。いや、アリオス・マクレインの噛ませ犬として、と言った方がいいのかな？」
「なっ……」
ワジが言っているのは、特務支援課最初の任務である、ジオフロントの探索のことだった。
彼らはその捜索途中で迷子の子供を見つけるも、魔獣に襲われ危機に陥ったのである。そこに助けに入ってきたのが、アリオス・マクレイン。この街の遊撃士ギルドのトップで、《風の剣聖》のふたつ名を持つA級遊撃士である。
初任務での手柄を遊撃士ギルドに持っていかれ、それを週刊誌《クロスベルタイムズ》にすっぱ抜かれるという、特務支援課にとっては痛い船出だった。
「あぁ、ゴメンゴメン。一応、少しは、役に立ったんだっけ？」
「ぐっ……」
明らかな挑発と判っていても、思わずいらついてしまうロイド。その表情の変化を見て、十分に楽しんだワジが、余裕たっぷりに続ける。
「イジめるのは、このぐらいにしておいて……自己紹介といこうか。僕はワジ。ワジ・ヘミスフィ

ア。一応、『テスタメンツ』の頭（ヘッド）をしてるみたいだよ？」
　ワジの後を受けて、ヴァルドも名乗りをあげた。
「――ヴァルド。ヴァルド・ヴァレスだ。『サーベルバイパー』の頭（ヘッド）をやってる」
「ワジにヴァルドか……」
　一見落ち着いた言動に聞こえるワジだが、その実はかなりの凄味を感じさせる。
　むろん、直接威圧的な言動をするヴァルドは言わずもがなだ。
　だが、ふたりの関係は、そこまで悪くなさそうだ。そうロイドは思い、わずかな安堵を感じた。
「改めて、クロスベル警察・特務支援課のロイド・バニングスだ。ふたりとも、どうやらこれ以上事を構えるつもりはなさそうだし……ここは、任せてもいいのかな？」
　不良の軽いもめ事に、あまり警察が首をつっこみすぎては、彼らのメンツを潰すことになる。そこでロイドは、彼ら自身で手打ちにしてもらおうと考えた。
　だが、そのもくろみは、あっさりと崩れ去った。
「ククク……ハハハハハッ！」
「フフ……ウフフ……あははははっ！」
　ワジとヴァルドは、同時に爆笑した。
　どうしたことかと戸惑うロイドに、涙をぬぐいながらワジが言い放つ。





「いやいや、おめでたいなー」
獲物を前に舌なめずりをするような表情で、ヴァルドがその後を受けた。
「事を構えるつもりがない？　何を寝ぼけたことを言ってんだ？」
「なに……」
「この場は手を引くよ。でも、それはただ単に準備が済んでいないからさ」
前髪を指で払いながら、ワジはヴァルドをにらみつける。
「――準備が終わり次第、徹底的にやり合うつもりだよ」
ワジの視線を真っ正面から受け止めるヴァルド。バン！　と音を立て、自分の手のひらに拳を打ちつける。
「それも今までみたいな、セコイ小競り合いじゃねえ……どちらかを根絶やしにするまでの、ぶっ潰し合いよ！」
その声色にうすら寒いものを感じ、ロイドやエリィは息を呑んだ。
「おいおい……殺し合いでもするつもりかよ？」
あえて脱力するようなトーンでランディが問いかける。それにヴァルドは、肉食獣の笑みで答えた。
「そうなっても不思議じゃねえだろうなァ。ま、どちらが血ヘドを吐くかは分かりきってるけどよォ？」
「言ってなよ」
ギラギラとしたヴァルドの視線を、冷ややかな視線で受け止めるワジ。こちらは氷のような微笑で返す。
止めないとマズい。そう思い、口を開きかけるロイド。
その動きを見透かすように、ワジが振り向き、冷たく言い放った。
「まあ、どっちにしてもお呼びじゃないってことさ」
スッ、と目が細められ、ロイドたちを何の価値もないと断ずるような口調で続ける。
「腰抜けの警察の犬――まして、君たちみたいな若造(ガキ)はね」
「っ……！」
ロイドは何も言えなかった。
確かに、この街では警察の権威はかなり落ちているし、自分たちはできたばかりの組織である。さらに言えば、つい先日辞令を受けたばかりのひよっ子だ。しかも、支援課のほとんどが、捜査官の資格を持たず、警察官という肩書きすら怪しい人物ばかりときている。
反論の余地は、まるでなかった。
黙ってしまったロイドの様子を見て、己の中の加虐心が満足したのか、ヴァルドが引き上げ

命令を出した。
「行くぞ、てめえら！」
オッス！　という怒号にも似た返答が、サーベルバイパーのメンバーから次々に上がる。
その様子を見て、ワジもスッと手を上げた。
「フフ……こちらも引き上げるよ」
「了解だ」
ワジの傍らに立つスキンヘッドの男が答える。テスタメンツのメンバーは返答もなく、無言で姿勢を正し、ワジの後ろへとつき従っていった。
人々の足音が消え、最後にロイドたち特務支援課のメンバーだけが、ダウンタウンの広場に取り残された。
ロイドは無言のまま、立ち尽くしていた。その様子を気遣い、エリィが話題を変えようとみんなに声をかける。
「困った人たちね。それにどちらも、かなり本気みたいだったわ」
ランディが、呆れつつ答えた。
「お嬢の言うとおりだぜ。あの調子だと、準備が整ったらすぐにでもやり合うつもりだな。血を見るぞ、こりゃ」



「でも、課長からの任務は一応終えた形にはなりますし……これ以上は任務外なのでは？」
ティオの問いかけに、ロイドは首を振った。
「いや、違う」
ロイドから、強い意志を感じる言葉を聞き、エリィたちは自然と姿勢を正した。
「ここで放置するということは、彼らの抗争を見て見ぬふりをするということだ。それじゃ、本当の意味で任務を終わらせたことにはならない。俺たち特務支援課に課せられてるのは、ただ任務をこなすことだけじゃない。事件の解決を通じて、警察に対する市民の信頼を取り戻すことだ」
ロイドの言葉に、確かに、とうなずくエリィ。
「でもよ、具体的にはどうするんだ？　『お前ら仲良くやれよ』なんて言って、聞くような連中じゃないだろ」
軽く茶化しつつ、ランディが言う。
「そこが頭の痛いところなんだけど……」
そう言いつつ、頭をかくロイド。その手が不意に止まった。軽くうつむいて、考え込む。
「どうした？」
「そういえば……どうしてあの二チームは『潰し合う』つもりなんだ？」

ロイドの疑問に、今度はエリィやランディが首をかしげる。
「どうしてって……」
「そりゃ、縄張り争いだの、意地の張り合いだのってあたりだろ？」
「いや、それだけじゃ普通、本気の潰し合いにはならない」
ロイドは顔をあげ、続けた。
「利権が絡んでるならともかく、街の不良同士のいざこざだ。念入りに準備してまで、徹底的に潰し合う必要があるとは思えない」
縄張り争いや意地の張り合いは、不良グループにとっては日常茶飯事であり、そこまでヒートアップすることにはならない。
そのロイドの考えにいたったエリィたちは、みな目を見開いた。
「……驚きました」
「ええ、私も」
「ふーん、なるほどねぇ」
彼らの口ぶりに、それまでの確信が急にしぼんでいくロイド。
「そんなに、変なこと言ったかな？」
「ううん、さすが捜査官の資格を持っているだけはあるなって、そう思ったの」



「いいとこ突いてると思うぜ。それに見たところ、ヘッド同士はそこまで険悪って雰囲気でもなかったしな」
エリィとランディが、口々にロイドの視点を褒める。ふたりはロイドとつきあいはじめてまだ日が浅かったが、彼が時折見せる視点の多様さと鋭さは、かなりのものだと感じていた。
ふたりに自分の考えが認められ、わずかに顔をほころばせるロイド。と、ティオがつぶやいた。
「……多分、理由があるのではないかと。当事者以外は知らない、本気で争うだけの、何かが」
彼女も、発言によってロイドの考えを支持する。
みなの向いている方向がひとつになった、とロイドは確信した。
「だったら……やるべきことはひとつだろう？」
「だな」
ランディがうなずき、エリィとティオも後に続く。
「これより特務支援課は、サーベルバイパーとテスタメンツの抗争を止めるべく、捜査を開始する――！」

その日の夜。
ロイドたち特務支援課は、行政区にある警察本部ではなく、クロスベル市街の中央広場横に

あるビルにその居を構えている。
　これは、依頼や事件で出動する際の即時応答性を高めると同時に、より市民に近いことを印象づけるためのアピールの意味もあった。
　ビルの一階はクロスベル警察分室・特務支援課。二階と三階が、ロイドたちの寮となっている。
　その寮の一室に、ロイドは戻ってきていた。
　扉を開け、着の身着のままで、ベッドに倒れ込む。洋服がしわになるのは嫌だったが、それ以上に身体が休息を欲していた。
「うあー……」
　声にならないうめき声を出して、ひと息つく。
　ロイドは警察学校で鍛えているので、身体にはある程度の自信はあったが、支援課の仕事は問題の調停役や、一筋縄ではいかない事件など、肉体ではなく精神的に疲労するものも多い。しかも本人の性格と若さ故に、それらの問題を真正面から受け止めてしまうので、より疲れてしまうのだった。
「着替えなきゃ……それに、エニグマ(携帯端末)の結晶回路(クオーツ)のメンテナンスもしないと……」
　第五世代戦術オーブメント、通称ＥＮＩＧＭＡ(エニグマ)。携帯できるサイズと重量の戦術オーブメントで、通信機能なども搭載している。警察から支給されているエニグマは、この街に張り巡ら



されつつある導力ネットワークと共に、なくてはならないものとなりつつある。いざという時に使えなくては困るので、日々のメンテナンスを欠かさないようにしていた。
　寝たがる身体を無理矢理ベッドから引きはがし、机に向かってのそのそと歩く。ポケットから取り出したエニグマを机の上に置くと、ストラップとしてつけている、兄の形見のネームタグが目に飛び込んできた。
　ネームタグには、深い刀傷が一本、斜めに入っている。死の間際につけられたものだろうか。
　ロイドは無言でしばらくそれを見つめ、そのまま視線を上に滑らせた。壁に貼りつけたコルクボード、その真ん中に貼られている写真を見つめる。
　そこには、兄ガイとその恋人セシル、そして少年の頃のロイドが写っていた。

# 第二章　ロイドの運命

兄が死んだ。
最初に言われた時は、何を言っているのか理解するのにしばらくかかった。

兄貴が死んだ……？

ロイドの兄ガイは、クロスベル警察の捜査官だった。エリート集団と言われる捜査一課に属し、多くの事件で手柄をあげ、さらなる活躍を期待されていた。
しかし、とある事件の捜査中に、何者かに襲われて、そのまま帰らぬ人となった。
危険な仕事だとは知っていたが、ロイドは兄が死ぬということを、まったく想像だにしていなかった。
ロイドの混乱を余所に、葬儀の手続きは慌ただしく進んでいた。
しかし、ロイドにはそれがどこか現実離れした出来事にしか感じられなかった。
今すぐにでも、

「いやぁ、悪い悪い」



などと言って、兄が帰ってくるのではないか。そう思っていた。
しかし、何度か挨拶したことのある、兄の友人という警察の人がやってきて、涙混じりにおくやみの言葉を述べたとき、これが本当のことなのだと、うっすらと理解した。

セシル姉（ねえ）を守らなきゃ。

次にロイドが考えたことは、それだった。
兄の恋人で、誰よりも兄を好きだった人。
彼女は今、とても悲しんでいるはずだ。現実感の伴わない自分よりも、ずっと。
だとしたら、俺が支えてあげなくちゃ。
兄とセシルと、いつも三人一緒だった。兄がいない今、自分が支えなくては。いや、自分以外に支えられる人間などいない、そう思った。
そこに、セシルへのほのかな愛慕があったことに、少年であったロイドは気づかなかった。
葬儀の日は、今にも降り出しそうな曇天だった。
喪服に身を包んだ大人たちが、うつむいて祈りを捧げている。ガイが埋葬された墓の前には、あふれんばかりの人が詰めかけていて、生前の交友関係の広さと人柄を物語るようだった。ま

だ若く、前途あふれる死を誰もが悼んでいた。
そんな中、ロイドはセシルの姿を探した。葬儀は朝から執り行われていたが、ずっと姿が見えなかった。
どこかで、泣いてるのかな……だとしたら、俺が行ってあげなくちゃ。そう思い、人混みを縫うように探していた時だった。
「ロイド！」
聞き慣れたセシルの声だった。ロイドはとっさに反応し、その方を向いた。
セシルは見慣れぬ喪服に身を包んでいた。
しかしその表情は――笑顔だった。
あっけにとられたロイドの元に、セシルが駆け寄る。そこではじめて彼は、セシルの表情の意味に気づいた。
「大丈夫、大丈夫だよ」
目尻に涙を浮かべつつ、いつもの笑顔をなんとか作りながら、セシルは言った。
「ガイさんの代わりに、私がお姉ちゃんになるから」
その言葉を聞いた瞬間、両肩に鉛を乗せられたかのような重みを感じ、肩を落とした



俺が……俺がセシル姉を支えなくちゃいけないのに！

支えられると思っていた。仮にも自分は男で、セシルはかよわい女性で。だからこそ支えなくちゃと思い上がっていた。
だが現実は、ただ一方的に心配されるだけ。
自分はそれほど弱々しく、頼りない存在なのだろうか？
それを認めたくなくて、でも認めるしかなくて、ロイドはぎゅっと拳を握りしめる。
泣くな、泣くな、泣くな。
心でそう思っていても、身体は、瞳は反発するように涙をためる。
そんな様子を見て、セシルは静かにロイドを抱きしめた。
「大丈夫、大丈夫だよ……」
その声がわずかに震えているのを聴きながら、ロイドは泣いた。ガイを失った喪失感、自分のふがいなさ、身体を通じて伝わるセシルの悲しみ。それらがすべてまぜこぜになり、やがて何故泣いているのかわからなくなっても、泣いた。

それから、数年の時が過ぎた。

クロスベル自治州有数の森林地帯である、ノックス森林地帯。その一画にある窪地に、クロスベル警察学校はある。

このあたりは市街地から離れているため娯楽は少ないが、その分、技能習得のためには最適な場所と言える。

クロスベル警察に勤務するあらゆる警察官は、ここで基礎をたたき込まれる。基礎教養から法律、クロスベルという国家の成り立ち、犯人を捕獲するための格闘術、その他さまざまなものを吸収してはじめて、警察官になる。

クロスベルは急速な経済発展を遂げ、それと比例するように犯罪も凶悪化していく中、警察の役割と負担は日に日に大きくなっている。

しかし、それを担うはずの若者はあまりいないのが現状だった。

警察学校内。『B講義室』と札が下げられた部屋に、明日のクロスベル警察を担う若者たちが集まり、授業を受けていた。

その数は二十名弱。みなクロスベル警察の制服を身につけていたが、階級章にあたる部分に、若葉を模したバッチをつけていた。彼らが警察学校の生徒である証である。

彼らは机を半円状に並べ、ひとりの教官を取り囲むように座っている。



その中に立つのは、同じくクロスベル警察の制服に身を包む、ひとりの初老の男だった。名をジェフという。顔には年相応のしわが刻まれ、頭部はだいぶ寂しくなってきているが、その眼光の力強さは、年齢を感じさせないものがあった。

ジェフはこの警察学校の教官のひとりであり、今は彼の講義による『模擬捜査会議』の真っ最中だった。

模擬捜査会議とは、実際にクロスベル警察で行われているような形式で、情報を提示され、そこからどのような捜査方針をとるべきか判断したり、犯人を推論したりする、実践的な授業である。それと同時に、この警察学校でも、一、二を争う難解な授業としてその名をとどろかせていた。

ジェフ教官は、手元の捜査資料を読み上げながら、部屋の前面に貼られたボードにある、容疑者や被害者の相関関係図を指し示し、説明している。

生徒たちは必死にメモを取っていて、教室内は筆記具を走らせる音と、ジェフ教官の声だけが響いていた。

そのジェフ教官の声が止まる。

「……以上が、今分かっている情報だ」

生徒たちの間に、とまどう空気が流れる。容疑者を特定するには、あまりにも与えられてい

る情報が少なすぎた。
「ではこの場合の捜査方針、分かる人」
　生徒たちが顔を見合わせる。当てずっぽうに答えるしかないが、その後のジェフの理知的な反論、というか問い詰めが恐ろしく、なかなか手を上げられない。
　その時、スッと手を上げるひとりの青年がいた。ジェフ教官は彼を指差し、答えを促す。
「ロイド・バニングス」
　ロイドは、はい、と答え、イスから立ち上がる。一七歳という年齢らしい、キビキビとした動作だ。
「この場合は、まず被害者の家族の線を洗い直します」
　教室内が軽くざわめく。それを無視して、ジェフ教官はロイドに問いかける。
「理由は？」
「犯行当時、家族しか知らない情報が多すぎます。それに、家族には事件が起きた時間のアリバイしか取っていません。容疑者とされる男Ａと同じように、事件の直後だけでなく、その前後の時間も調査すべきです」
　背筋をぴしっと伸ばし、要点をまとめて伝えるロイド。ジェフの前では怖じ気づき、しどろもどろになる生徒もいる中、まったく物怖じしない様子で答えた。



「大事な家族を失った悲しみにくれる人たちに、疑いをかけるようなことをすると？」
　眼光するどくジェフ教官は言い放つ。老いてもなお衰えぬ威圧感は、彼がかつて捜査一課のベテラン刑事だったことを語るに十分だった。
　ロイドは、その瞳をまっすぐに見つめ返す。
「その悲しみを生み出した犯人を捜すのが、俺たち警察官の仕事です。そのために嫌な役を引き受けるのは、仕方がないことだと思います」
　ジェフの目元がふっと緩む。
「正解だ。我々の仕事は家族と一緒に悲しむことではない。強靭な意志と粘り強さで、犯人を追い詰めることだ」
　促されて座ったロイドに、隣の席のフランツが小声ではやし立てる。
「さっすがロイド！」
「おだてても何も出ないぞ」
　そう言って苦笑するロイド。実際、褒められたところで、得意になることはなかった。
　兄貴なら、きっとそう考えて行動するはずだ——
　捜査一課にいたこともある兄のガイ。その思考をトレースすれば、自ずと正解は見えてくる。言わば、アンチョコを持っているようなものだ。

「では、今日はここまでにしよう」
ジェフ教官の声で、生徒たちがみな立ち上がる。
「礼！」
ロイドの号令で、頭を下げる。それを見渡し、ジェフは教室を出て行った。
彼が出て行ったと同時に、生徒たちの緊張がほどける。
「はー終わった終わったー！」
「相変わらずジェー様はキッツい課題出すよなぁ」
生徒たちの間でも、ジェフ教官の講義は厳しくて有名だった。しかし、人間として魅力的なジェフ教官を慕う生徒は多く、ジェフ教官のひっかけた『爺様』とひっかけた『ジェー様』というあだ名がついていた。
「それにしても、毎回毎回よく答えられるよなぁロイドは」
「しかもだいたいあってるし」
「そうかな？　問題点を指摘されることも結構あるけど」
「いやいや、普通はまず当たらないって」
ジェフの講義では、極端に情報が少ないケースや、逆に情報が多すぎて容疑者を絞りきれないケースが多く、プロの捜査官でも頭を悩ませるような設問で有名だった。警察学校に通っているとはいえど、素人に毛が生えた程度の生徒たちでは、到底太刀打ちできないのも当然である。



「ところでロイド、捜査官試験、受けたんだって？」
フランツの言葉に驚き、どうしてそれを、と口を開きかけたところで、他の生徒たちに取り囲まれてしまった。
「おいマジかよ!?」
「あれって実務経験ないと受けられないんじゃないのか？」
「推薦状があればなんとかなるらしいぜ」
「それなら俺もダメもとで受ければよかったなー」
「お前じゃ空が落っこちて来ても受かんねーよ」
「それよりロイド、どんな感じだったんだよ？　イケそうなのか？」
「いやいやー、さすがのロイドでも無理だろ」
「なぁ、面接とかあったのか？　現役の捜査官が面接するってホントか？」
「ちょ、ちょっと待ってくれ、みんな」
矢継ぎ早に質問を出されて、頭が混乱しそうだった。ロイドはみんなをなだめると、かみ砕くように説明した。
「まず、試験を受けたのは本当だ。推薦状を書いてくださった教官がいて」
ひとりが歓声を上げる。他の生徒たちが、静かに、とたしなめ、ロイドに続きをと促した。

「面接はあったけど、現役の捜査官じゃなかった。それはそうだよな、捜査で忙しいんだし」
「なんだよー、それはちょっと肩すかしだな」
「とはいえ、本物の捜査官と面接なんて、それはそれで緊張するしな」
「で、肝心の手応えの方はどうなんだよ？」
フランツに言われ、ロイドは曖昧な笑みを浮かべた。
「正直なところ、分からないよ。やれることはやったけど……それと結果は別さ」
「でも『まるでダメだった』ってワケじゃないんだろ？　なら可能性はあるぜ」
ありがとう、と答えるものの、正直なところロイドは、結果にはまったく期待していなかった。
ただ、今回ダメでも、合格するまで粘り強く受け、絶対に捜査官になる、と堅く心に決めていた。
「ひょっとして……いきなり捜査一課に配属、なんてこともあるんじゃないか？」
捜査一課。クロスベル警察捜査課のひとつで、重要犯罪を専門に扱う、エリート中のエリートである。捜査官を目指す者にとって、一課の名前は特別な響きと重みがあった。
しかしロイドは、それはないよ、と即答した。
捜査官になるのすら困難なのに、その捜査官の中でも、エリートしかなれない捜査一課に配属されることは、夢のまた夢のように思われた。

だけど、いつかは捜査一課の一員になりたい。そうロイドが考えるのは、兄ガイが殉職するまで所属していた課だからでもあった。
その時、開けっ放しの教室のドアをノックする音が響いた。皆が振り向くと、そこには女性教官のケイトがいた。ロイドのまわりにたむろしていた生徒たちの何人かが歓声を上げる。警察学校では女性教官は少なく、一部の生徒たちからはマドンナ的存在として扱われているのだ。
ちなみに彼女は普段、巡査としてクロスベル市街で働いているのだが、定期的に警察学校にやってきては、臨時教官としてロイドたち生徒を教えている。クロスベル警察と同じく、警察学校もまた人手不足なのだ。
「ロイド君、いる？」
「あ、はい」
ロイドはイスから立ち上がって、ケイトの元へ駆け寄る。
はいこれ、と言って、ケイトは封筒を差し出した。封筒には、クロスベル警察の紋章が印刷されている。公式な文書を入れる際に使うものだった。
「あの……これは？」
「心当たりあるんじゃない？」
なおも首をかしげるロイド。開けてみなさい、と促され、封筒を開けるとそこには、『捜査

官認定試験の結果のお知らせ』と書かれた一枚の書類が出てきた。
さらに視線を下にずらしていくと、

『合格』

という文字が目に飛び込んできた。
「おめでとう、ロイド君」
顔を上げると、ケイト教官の笑顔が目に入った。
「実務経験がないままの合格は、数例しかないわ。教官たちも皆、あなたを誇りに思ってる」
ありがとうございます、というロイドの言葉は、フランツをはじめとする友人たちの歓声にかき消されてしまった。
夜の帳（とばり）が下り、皆が寝静まる頃。
ロイドは部屋で、机の灯りひとつを頼りに法令書を読みふけっていた。
警察学校は全寮制で、寮の建物は講義をする建物から徒歩数分のところにある。みっちりと訓練にはげめる環境は理想的ではあるが、生徒たちからは嫌われてもいた。
寮の部屋はふたりで一部屋を使うのだが、同室であるフランツは、既にベッドに潜り込んで



いる。
「ロイド～、まだ起きてるのかよ」
「すまない、眠れないか？」
「もう慣れっこだよ……」
そう言って大きなあくびをするフランツ。勉強家のロイドと同室になったのは彼の不幸だが、フランツは大家族で育っていたため、多少明るかったり騒がしくても眠ることができた。
「でもさぁ、なんで来なかったんだよ。お祝いなんだから、おごるって言ったのに」
フランツはとろんとした声で続ける。彼が言っているのは、ロイドの捜査官試験合格にかこつけた祝宴のことだった。
ケイトから合格発表を告げられた後、生徒たちは大騒ぎとなり、さっそくクロスベル市街へ祝杯をあげにくりだそう、ということになった。
だが、当事者であるロイドが市街へ行くことを頑なに拒んだため、一部有志のみで行くこととなったのだ。
「ま、ロイドのお祝いとか言って、ただ単に俺たちが騒ぎたいだけなんだけどさ」
そう言って、ベッドから身を乗り出して笑うフランツ。ロイドはその裏側に、つきあいの悪い自分をフォローしてくれる気遣いを感じ取っていた。

「悪い」
「だからいーって。でもさ、ここにずっといたら、息が詰まらないか？　ロイド、学校入ってから一度もクロスベルに行ってないだろ？」
それは本当のことだった。兄の死後、叔父の家に引き取られてからは一度も行っていない。
ロイドはあいまいな笑みを浮かべた。
「買い物とかは困っていないし、それに今は勉強が忙しいから」
フランツは、ふーん、と気のない返事をし、そのままあくびをすると、もぞもぞとベッドに潜り込んでしまった。
再び静かになった部屋の中で、ロイドは法令書を見つめる。だが、その目は文字を追っていなかった。
クロスベル、か……。
そう、心の中でつぶやく。
兄ガイの死後、兄の婚約者であったセシル一家の誘いを断り、国外にある叔父の家を頼った。そして十七歳になるのを待ち、すぐに警察学校に入校した。



市街までは、小一時間ほどの距離だ。行こうと思えばいつでも行けた。しかしそれをしなかった。
兄と同じように捜査官になり、一人前になるまでクロスベルには帰らない――そう心に誓っていたからだ。
まったく、子供じゃあるまいし。
そう思い、思わずふっと顔を緩めた。が、その表情にすぐに影が落ちる。
――子供なのかもしれないな、俺はまだ。
ロイドは机の引き出しを開け、今日もらった合格通知を取りだした。『合格』の文字をじっと見つめる。
捜査官試験に合格すれば、一人前になれると思ってた。けど……今の自分は、果たして一人前と言えるのだろうか？
自問しても、答えは出ない。
机の前の壁に貼りつけてある、写真を見た。そこには、三年前に撮った写真が貼ってあった。セシルと、ロイドと、ガイの姿がある。
「……兄貴」
灯りひとつの薄暗い部屋の中で、ロイドは写真に声をかけた。

「追いかければ追いかけるほど、兄貴の背中が遠くなっていく気がするよ」
ロイドの声に答えるものは、誰もいなかった。

月日が過ぎ去るのはあっという間だった。
捜査官試験合格の報に喜ぶ間もないまま、ロイドは警察学校のカリキュラムをこなしていった。
そして気づけば、すべての訓練課程は修了し、警察学校を卒業する日となった。
正確に言うと『警察官となるための訓練課程の修了』なのだが、みな『卒業』という言葉が通りがよいのでそちらを使っていた。
体育館兼講堂で、簡単な式が執り行われた。いわゆる卒業式である。
教官たちが並び、自分が指導し、しごいてきた生徒たちを見守る。
入ってきた当初は幼さを残した顔つきも、今ではきりりと引き締まっていて、成長を感じさせた。その様子を見た教官の何人かは、うっすらと目に光るものをためていた。
式が終わった後。大半の生徒が寮に戻り、学校は静けさに満ちていた。
そんな中、ロイドは歩き、教官室の扉の前に立った。



軽く息を吸い込み、ノックをする。
「失礼します」
そう言って扉を開けた。
座っていたイスを回し、ジェフ教官が、おう、と答える。
教官室は学校で言うところの職員室にあたる場所で、各教官はそれぞれ机を割り当てられている。
ジェフは、並べられた机の奥、窓際の日当たりのよい場所に陣取っていた。
そこまで歩き、彼の前で止まる。
ジェフはイスに座ったまま、教え子の晴れ姿を上から下までゆっくりと見た後、言った。
「ロイド・バニングス。卒業おめでとう」
「ありがとうございます、ジェフ教官。教官には、いろいろお世話になりっぱなしで、なんとお礼を言っていいものか」
ロイドの言葉に嘘はなかった。兄のような立派な捜査官になりたい、というロイドにとって、捜査一課たたき上げの捜査官であったジェフの言葉・考え方は、まさに生きた教科書だったからだ。
「捜査官試験の推薦状を書いてくださったのもジェフ教官でした。教官の推薦をいただけなけ

れば、試験を受けることすら許されなかったとお聞きしています」
「買いかぶりすぎだ」
軽く手を振って否定するジェフ。しかし、ロイドの言うことは事実だった。
捜査官試験を受けるためには、捜査官資格を持つ上司の推薦状が必要となる。
本来なら、警察官となった後で現場で働き、その活躍や能力が認められて、はじめて推薦状を書いてもらえるものだ。
いわばロイドは、特例で受けることが許された。それは、ジェフの昔の肩書きと、その時に培った警察内部のコネクションが無ければ不可能だっただろう。
「それから……退任されるとのことで、残念です」
「定年だからな。これからは、のんびりと余生を過ごすさ」
ロイドたちと時を同じくして、ジェフもこの警察学校を去ることになっていた。
「息子夫婦が、一緒に暮らさないかと言ってくれてな。クロスベルを去るのは少し寂しいが、孫と過ごせるのならそれも悪くない」
そう言って目を細める。
数多くの犯罪者と、出来の悪い生徒たちを震え上がらせてきたジェフも、孫には勝てないということか、とロイドは内心で微笑んだ。



「いいおじいちゃんになりそうだ、とか思っていたのか？」
「い、いえ、そんな」
ズバリ言い当てられて、ヒヤリとする。このまま話を続けるのはまずいと判断し、話題を変えることにした。
「ところで教官、今日は何の用事でしょう？」
ロイドはここに、別れの挨拶をしに来たわけではない。もちろん、式の後にちゃんと挨拶をするつもりでいたが、先に声をかけたのは、ジェフの方だったのだ。
彼はロイドを見つめ、軽くお茶でも誘うかのような口調で切り出した。
「最後に一問、君に解いてもらいたい問題があってな」
「え……」
「模擬捜査会議だ」
ジェフのひと言で、空気が変わったようにロイドは感じた。ただ別れを言うために呼んだのではなく、最後の講義を受けさせるために自分は呼ばれた、そう理解した。
「どうかね？」
「ぜひ、お願いします」
ロイドは間髪入れず答える。ジェフからは多くのことを学んだが、まだまだ学び足りないと

思っていた。最後に自分にだけ、講義をしてくれる。しかも、彼の最後の生徒として。その好意と栄誉を断る理由はどこにもなかった。
「よろしい。では、最後の模擬捜査会議をはじめる」
ジェフ教官は言い、目を閉じた。講義をするときの、彼の癖だった。この癖を見るのも最後か、という感傷が一瞬ロイドの心をよぎったが、すぐに集中し直した。ジェフ教官の最後の難題を、絶対に解いてやろう、という思いからだった。
しかし、意気込んでいたロイドは、ジェフの言葉に肩すかしを食らった。
「この事件では、容疑者の目星は既についている」
それでは捜査をする意味がない。そう思った矢先に、ロイドが思いもしなかった言葉が飛んできた。
「しかしその犯人は、帝国の有力者であることが分かっている」
ジェフ教官は事件の概要を述べた。中身はよくある詐欺事件だったが、被害者はクロスベルの小さな商店の店主、容疑者は帝国から派遣されている駐在武官、というものだった。
「複数人の証言もあり、立件は容易だ。だが、もし立件した場合、帝国派の議員から捜査への横やりが入る可能性は非常に高い。さらに、駐在武官というのも問題だ。帝国軍そのものへの敵対行動と取られ、ベルガード門のあたりに緊張が走ることは避けられないだろう」



「ですが……もしここで立件しなくては、その……」
ロイドの歯切れの悪い言葉を、ジェフはぴしゃりと叱る。
「ロイド・バニングス、言うべきことは、ちゃんと言いたまえ」
その言葉にロイドは姿勢を正し、はっきりとした声で言った。
「はい。ここで立件しなくては、警察に対する不信感が根強くあります。警察は弱腰、と市民に取られます。最悪、遊撃士協会につけ込まれ、彼らが調停に乗り出してくることでしょう。そうなれば、ますます信用が無くなり、今後の捜査にも支障を来すと思われます」
警察学校で、警察に対する批判をする。ロイドにとっては冷や汗ものの状況だったが、ジェフは意に介さず続けた。
「その通りだ。……で、君ならどうする？」
それは、と口に出して、ロイドは固まってしまった。
容疑者がほぼ確定している状況なら、立件して捕まえるのは当然だ。……だが、これは多分に政治的な問題をはらんでいる。一捜査官が判断すべき問題ではないのでは……いや、そうじゃない。現に犯罪の被害に遭い、困っている人がいるんだ。それを助けないで、なんのための警察だ。

ロイドは頭の中で議論を続ける。しかし、答えは出そうにない。
兄貴ならどう考える？　自然と、いつもの思考パターンに行き着く。しかし今回は、すぐに答えは出てこなかった。
兄貴なら、確実に犯人を追いかける……いや、捕まえたところで、外交官特権などを使われて確実に逃げられる相手を捕まえるだろうか？　他の容疑で立件する？　……いや、それも無理だし、この場合は逃げられる点に変わりはない。ロイドの思考は、堂々巡りに陥っていた。
いつもなら、イメージの中で活き活きと動き、事件解決への糸口を見つけるガイの姿。しかし、今のロイドには、まるでイメージができなかった。
目の前には、ロイドをじっと見つめるジェフ教官の姿があった。急くことをせず、じっと待つ。捜査官時代の凄まじい忍耐力が垣間見えるようだった。
どれほどの時間が経っただろう。あるいは数十秒だったかもしれないし、数分だったかもしれない。しかし、ロイドにとっては長い長い時間だった。
「――分かりません」
あきらめたように、かぶりを振って答えるロイド。口にすると、みじめな気持ちが胸に広がった。
最後の難題を解き、晴れやかな気持ちで卒業したかったが、そのもくろみは見事に打ち砕かれた。
敬愛する教官にして、偉大なる捜査官の先輩。その彼に見込まれ、捜査官のスタートラインに立った気でいた。
とんだ思い上がりだ。
そう思い、拳をぎゅっと握りしめる。
そんなロイドの表情をじっと見つめ、ジェフは言った。
「それでいい」
「え……」
驚いて、ジェフの顔を見るロイド。
「それでいい」
同じ言葉を繰り返してから、ジェフは窓の外を見やった。
「クロスベルは、難しい街だ」
ロイドに語りかけていながら、ひとりごとのようにも聞こえる調子で、ジェフは続けた。
「急速に経済的繁栄は遂げたが、それと比するように犯罪数も増加の一途をたどっている。しかも、帝国と共和国に挟まれた立地から、双方の国の干渉も多い。政治・経済の両方で、だ」
ジェフは、卓上に置かれているエニグマ（携帯端末）に目をやった。それには、クロスベル警察の紋章が

描かれている。
「警察は、捜査官は常に、難しい選択肢を迫られる。容疑者は悪で、それを捕まえればすべて丸く収まる……という事件ばかりではない」
そこまで言うと、イスをまわし、ロイドを見つめる。そこには、答えを出せなかったことに対する怒りも、出来の悪い生徒への哀れみもなかった。
「君は性急に答えを出さなかったな」
そこにはただ、自分の意志を託す後輩へ向けた、真摯なまなざしだけがあった。
「申し訳ありません」
「責めているわけではない。それが君の選択なのだろう？」
「いえ……優柔不断なだけです。捜査官としては、恥ずべき事だと思っています」
ジェフは眼を細め、そうか、とだけ言った。
内心で彼は、ロイドは優柔不断なのではなく、思慮深いのだと捉えていた。早急な答えは、事態を悪化させることも多い。特に若さは、分かりやすく手っ取り早い答えを求めがちだ。
若くしてそれだけ多くの見方、視点を持つのは希有なことで、それは兄であるガイの影響がとても大きいのだろう、とジェフは考えていた。
行動力と大胆さがガイの持ち味だとすると、ロイドは慎重さと視点の多様さが持ち味になる。



それは、兄にはない、彼にしか持ち得ない長所なのだが、今は兄の背中ばかりに目が向いていて、自分の良さに気づけていない。
とはいえ、自信を持つためには、多くの経験が不可欠である。いま言っても、仕方ないことだろう。
内心でそう結論づけたジェフは、話題を変えることにした。
「ちなみに、だ。私はこの事件……いや、問題を、ある人物に問うたことがある。君の兄だ」
ロイドの目が軽く見開かれる。
「どんな答えだか、聞きたいかね？」
「ぜひに」
いつも以上に力を込めて、ロイドはうなずいた。
自分が想像もつかないようなすごい答えが出てくるに違いない。ロイドはそう考えた。
その期待に満ちた顔を見て、ジェフは顔をほころばせて言った。
「君と同じ『分かりません』だったよ」
「え……」
「といっても、その後に続けて『その時になったら、身体が勝手に動くと思います。それに任せます』と言ったがね」

そう言って、クックック、と笑った。
「それは……」
肩の力ががっくりと抜けたロイドを見て、微笑むジェフ。
「がっかりしたかね？」
「いえ――なんとも、兄らしいと思いました」
教官室に、珍しくジェフの大きな笑い声が響き渡った。
それから少し雑談をし、お茶を出そうとするジェフを制して、ロイドは帰る旨を告げた。
「それでは、そろそろ失礼します。改めて、お礼を言わせてください。本当に、ありがとうございました」
ジェフはイスから立ち上がりながら言った。
「礼などいいと言っただろう。だが……もし礼をしてくれる気があるなら、一日でも早く立派な捜査官となり、ひとりでも多くの犯罪に苦しむ市民を助けてくれ」
「はい！」
自然と背筋が伸び、声が大きくなった。
ジェフが差し出した手を、しっかりと握り返す。



「それと、さっきの答えを、いつか聞かせてくれ。今のクロスベルで仕事をした君が、どんな答えを出すのか、興味がある」
必ず、とロイドはうなずく。
こんなすばらしい師に巡り会えた自分は幸せだ。
ロイドは心の底からそう思った。

教官室を出て行くロイドを見送ってしばらく後。
ジェフは卓上にあるエニグマを取り上げ、手早く番号を入力した。
クロスベル市内に張り巡らされつつある導力ネットワークが、ここにも試験的に導入されているのだ。
何度かのコールの後、相手が出た。
「……あぁ、私だ。例の彼だが『分からない』と答えた。……そうか、お前のお眼鏡にかなったか」
イスの背もたれに身体を預け、天井を見やるジェフ。
「で、どうする？　……そうか、うむ、そうしよう。いやいや、一課の方にはダドリーを以前推薦した。しばらくは送り込まなくてもいいだろう。……それに、かわいい教え子の頼みとあれば、聞かないわけにはいかないからな」

電話口で相手が何か反論をしたようだが、ジェフは鷹揚に遮って続ける。
「伝説の脱走と無断外泊で、ここを追放処分になりかかった頃が懐かしいな、えぇ？」
相手が沈黙し、ジェフは愉快そうに微笑む。
「ま、切れ者すぎて冷や飯食らいの警部殿も、私にとっては、かわいい教え子ということだ。でなければ、警察学校の教官として腐っていたおまえさんを、現場に戻れるようかけあったりはしない」
はぁ、と向こうからのため息を聞いて、またもくっくっとノドを鳴らして笑った。
「では、ロイド君は特務支援課配属ということで。私からの最後の餞別だ。……次はお前が、みっちり鍛えてやってくれ。頼むぞ、セルゲイ・ロウ」
導力通信を切り、エニグマを置く。そのままジェフは、窓の外を見やった。
薄曇りの空からわずかに晴れ間が差し、陽光が若木に降り注ぐ。
寒さの中にも、萌芽を感じさせる光景だった。

導力列車がベルを鳴らし、レールの上を駆け抜けて行く。
共和国からクロスベルへと向かうその車中に、ロイドはいた。
先ほどホームで、世話になった叔父夫婦に別れを告げ、列車に乗り込んだところである。



レールのつなぎ目が作り出す、ガタンゴトンという定期的な音に眠気を誘われる。そんな頭を振り、胸元から一通の封筒を取り出し、その中にある辞令に再び目を通した。

『ロイド・バニングス捜査官
クロスベル警察・特務支援課への配属を命ずる。』
『捜査官』のところに何度も目を通して、ようやく辞令を封筒にしまった。

ようやく、ここまで来た。

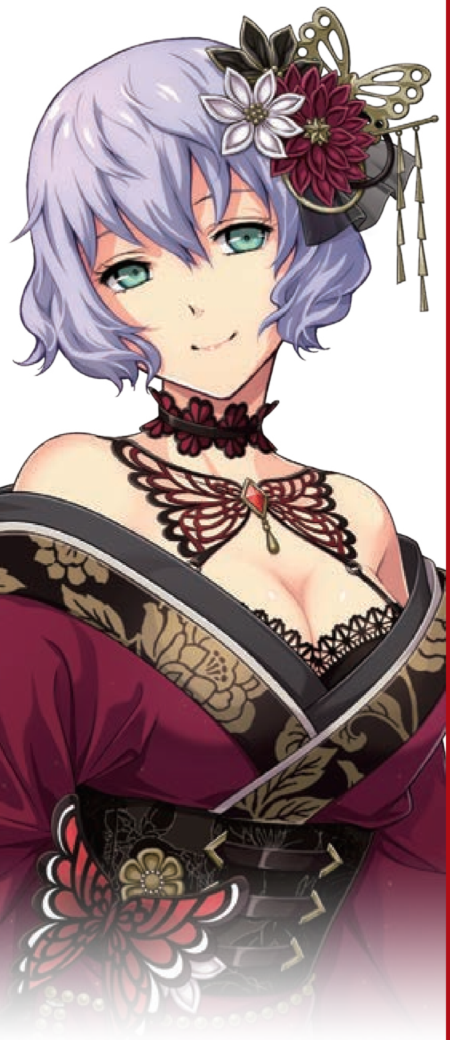
車窓を流れる景色を見つめながら、ロイドは感慨に浸っていた。
一人前になるまで、クロスベルには戻らないと誓っていた。そして今日、兄と同じ捜査官として、クロスベルへ赴任する。ロイドにとって、ひとつの大きな区切りであった。でも、これはまだはじまりに過ぎない。ようやくスタートラインに立てたんだ。そう心の中でつぶやく。
我知らず、ぎゅっと拳を握る。そのことに自分で気づき、苦笑して、その拳をほどいた。
堅くなりすぎるのもいけない。少し眠っておこう。そう考えた瞬間、急に眠気が襲ってきた。

あくびをひとつかみ殺す。
昨日はさすがに興奮して、ほとんど眠れなかったのだ。
瞳を閉じ、背もたれに身を預けると、次の瞬間には眠りに落ちていた。

ひとりの青年の希望と不安を乗せ、列車はひた走る。
彼はまだ知らない。このレールの行き着いた先、クロスベルで待ち受ける運命を。
それは彼だけでなく、多くの仲間と敵を巻き込み、クロスベルの歴史に名を残すような大事件であった。







# 月刊 FALCOM MAGAZINE Vol. 155


| | |
|---|---|
| 発行人 | 田中一寿 |
| 発行協力 | 日本ファルコム株式会社 |
| 編集 | 小渕智幸<br>河野崇 |
| デザイン・DTP | 株式会社 ACQUA |
| 表紙ロゴデザイン | 荻窪裕司（デザインクロッパー） |
| 発行 | 株式会社フィールドワイ<br>〒 101-0062<br>東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F<br>TEL 03-5282-2211（代表）<br>http://www.field-y.co.jp/ |




# FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

**『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ**

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！ ※絵柄はランダムです。

**ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/**

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp) まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.155プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）

2：面白かった記事の番号→
つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）

3：アンケート①『界の軌跡』の第一印象は？
アンケート②『界の軌跡』に期待していることは？

4：希望するプレゼント番号

5：ご意見・ご感想など

**記事一覧**

1：界の軌跡最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：ファルコムニュース
4：暁の軌跡最新情報
5：英雄伝説 零の軌跡 四つの運命

**応募締め切り 1月29日（月）**

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。